

「逃げ遅れる人々 ー東日本大震災と障害者」

上映会 & 報告・ディスカッション



日時：2013年11月9日(土) 13:30～16:00（学園祭会期中）

場所：神奈川工科大学 E3号館 1階プロジェクト室

共催：あつぎ「福祉の広場」実行委員会

神奈川工科大学 ロボット・メカトロニクス学科 小川研究室

「逃げ遅れる人々 ー東日本大震災と障害者」

上映会&報告・ディスカッション

3. 11を契機に日々の生活そのものの見直しを迫られ、また、行政の防災・被災に対応する障害者支援システムもしっかりと構築する必要が明らかとなりました。あれから2年を経過し、あらためて現地での声に耳を傾け、私たちの足元を見直す機会にしたいと思います。

ー プログラム ー

- ◆ 「逃げ遅れる人々 ー東日本大震災と障害者」上映 (74分)
- ◆ 被災地より報告 (約40分)
 - ・小野 和佳 氏(福島県 NPO 法人いわき自立生活センター)
 - ・古川 貞治 氏(岩手県 釜石市仮設住宅在住、認知症高齢者デイ、グループホーム運営)
- ◆ ディスカッション「震災における障害者支援のあり方」(約30分)
 - ・上記報告者のお二人とご参加の皆さんで私たちの足元の課題を検討します。
 - ・コーディネーター 神奈川工科大学教員 小川 喜道
- ◆ 情報保障：手話通訳・パソコン要約筆記・字幕映画・点字資料

手話通訳

・稲垣 巳恵子 氏 ・上床 千里 氏

パソコン要約筆記

・数見 満里子 氏 ・小林 宏美 氏
・菌部 真理子 氏 ・長谷川 泰子 氏

会場受付・案内等

小川研究室ゼミ生：藤岡 佳史・安楽 智樹・高橋 佑介・野々村 賢
古市 恭平・宮坂 愛利・内山 龍貴

◇主催連絡先：神奈川工科大学

ロボット・メカトロニクス学科 小川 喜道

電話 046-291-3153 FAX 046-291-3262

e-mail: ogawa@rm.kanagawa-it.ac.jp

目次

◇ 小野和佳氏プロフィール	1
◇ 古川貞治氏プロフィール	2
◇ 「福島の被災体験とこれからのこと」小野 和佳	3
◇ 釜石のスイセン、東京に咲く 古川 貞治 (岩手日報)	10
◇ 大津波からの生還 利用者サバイバル激闘記 古川 貞治	12
◇ 逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者 DVD 案内	21
◇ 生命のことづけ 死亡率2倍 障害のある人たちの3.11 DVD 案内	23
◇ 本イベントの紹介記事 (朝日新聞)	25

小野 和佳 氏 プロフィール

1982年11月18日生まれ（先天性の脳性まひ）

福島県立平養護学校に小学部・中学部・高等部と所属する

在学中はスポーツに興味があり、体育の授業が大好き。放課後も残って車いすバスケットや、ソフトボールを楽しんでいた。が、何故かクラブ活動は囲碁将棋クラブでした。

高校3年生で福島県の事業「ふれあいウイング」でアメリカにおいての福祉実情の研修に参加し、自立生活センターの活動に関心を持つ。

ふれあいウイングから帰国後、地元にも「自立生活センター」（現在の所属先いわき自立生活センター）があることを知る。当時、私の先輩であった、故M氏が当センターのヘルパーを利用しながら自立生活をしていた。私は、よくM氏宅へ泊りにいった。その時、「自立生活センターを運営しよう」と約束するも、その夢は叶わず・・・。

自立生活センターを運営するにしても、40歳くらいからかな・・・と考えていた私は、コンピュータの専門学校に2年間所属。卒業後、一般企業に就職内定するも、交通手段が確立できなかった（運転免許が取得できなかった）ため、内定を辞退することに。

2003年4月より、スタッフの増員を予定していたいわき自立生活センターのスタッフとして活動を開始することとなる。

2006年より福島県全身性障害者等連絡会の事務局を担う。

2007年、小規模作業所「工房アライブ」を開所し、「障がいを持つ人達自身も自分たちで働く場を創り上げよう」という目的として活動を開始する。

2011年、東日本大震災を受け、福島県内の5か所の自立生活センターにおいて、原発事故等からの障がい者の移住支援のため、神奈川県相模原市内に居住地を確保。2012年9月より、相模原に移住し、福島県の障がい当事者の県外移住支援に関わっている。

2013年8月より、神奈川県障害者自立生活支援センターに所属し、県外支援を継続中。

古川 貞治 氏 プロフィール

- ・岩手県釜石市鵜住居町在住。現在も被災者仮設住宅入居中
- ・高齢者デイサービスセンター
- ・認知症グループホーム ございしょの里 運営者
- ・東洋治療院（仮設店舗） 院長

2011.3.11 東日本大震災を岩手県釜石市鵜住居町にて経験。家、家財等全てを大津波にて失う。運営施設も大津波に飲み込まれ、1階フロアは、完全水没。2階フロアは、膝上近くまで浸水。デイサービス利用者、グループホーム入居者をテーブルに上らせ、職員が身体を支えながら高齢者全員の命を守った。翌朝、津波は引いたものの、飲み水、食べ物は無かった。そこで、高齢者全員の施設脱出が、消防職員等の救援を受けながら始まった。

しかし、認知症の方が、「歩くななんて嫌。タクシーを呼べばいいだろう」。また、「疲れた」と言って、ガレキの散乱する道なき道に寝転んでしまう方。

避難には言葉にならない、言葉にできない修羅場が展開された。

岩手県内のみならず、東京、神奈川、静岡、京都等にて 3.11 東日本大震災での「デイサービス利用者、グループホーム入居者との困難を極めた避難」、「あの日、そして今 復旧・復興とは」等の講演を精力的に行っている。



片付けに追われる古川貞治氏



現在の古川貞治氏



大震災直後 町の様子



施設入口 1階室内壊滅



施設から町を望む

福島の被災体験とこれからのこと

いわき自立生活センター 小野 和佳

1. 時間が経つごとに増す自分自身の無力感

その時、携帯電話から私にとって聞きなれない音が鳴り響きました。その音の理由を考え始めてから間もなく、目の前が大きく揺れ始めました。するとすぐに、立てかけてあるホワイトボード、電子レンジ等が大きな音を立てていきます。その音を聞きながら私は無意識のうちに、普段使用している手動式の車いすから降りて、デスクの下に体を小さくして入っていました。

「やはり、小学生時代からの避難訓練は役にたつのだな」などと、妙に冷静な自分がいたことにも驚いています。3分以上続いた強い揺れが多少おさまりかけると、情報を収集するためのツールが、あまりにも不足していることに気づかされました。

私達のセンターにはテレビやラジオが備えられていませんでした。かろうじて手動で発電し、ラジオが聞け、ライトがつくという緊急時用のものがありました。センターの理事長が外で一生懸命回しながらラジオを聞いています。その間にも短い間隔で大きな揺れが続いていました。私達のセンターは、本部、ホームヘルプ事業部、生活介護事業所アライブが併設されています。少し距離をおいたところに就労継続支援B型事業所ミントがあります。普段20名以上がいるセンターの中が妙な静けさに包まれていました。

センターの地域は、のちに断水しましたが、電気は止まりませんでした。IHを使用していた為、もともとガスは使用していません。ですが、電気が止まっていたら・・・テレビはもちろん、インターネットも使用できません。それを考えるとぞっとしてしまいます。

ここであえて書かせて頂きますが、私達は「電気に助けられていた」現実がありました

時間が経つごとに、ラジオから流れるニュースと私達の現実がリンクしていきます。

16時にAさんに入る予定のヘルパーがあわててセンターへやってきました。「道路が水で溢れていて通れません。」その時、あらためて実感したことの重大さにハッとしました。

生活介護事業所アライブを利用していたAさん。当日は、いつもより早めに帰宅し、ベッドで16時から支援に入る予定のヘルパーを待っていた最中でした。津波による被害で亡くなられました。

災害にとって時間や場所など関係ありません。災害は2次、3次被害を招く怖さがあります。私は時間をおうごとに自分の無力さを感じていました。そして、「人災」と呼ばれるものまで引き起こされることになるとは考えてもいませんでした。

2. 自立生活の充実さが生んだ弊害と、偶然にも恵まれた環境

自立生活センターのヘルパーを利用し、一人暮らしをしている障がい当事者にも様々な弊害がおきました。

①エレベーターの停止

強い揺れが起こると、エレベーターは緊急停止をします。問題は、各地で同時に緊急停止が起きると、復旧までに時間がかかるという点です。この状態になると、復旧作業が完了するまでの間、部屋を出るためには、人手が必要になります。地震等による災害が局地的に起きた場合であれば、人手を確保することも可能かもしれませんが、今回の様な広範囲になると、人手を確保することも厳しくなるというのが現実でした。

②連絡手段

固定電話を引いている単身者はどの程度いらっしゃるのでしょうか？ 震災後、災害時に連絡をとる手段として、「固定電話」、「公衆電話」、「スマートフォン」等があたりました。ですが、自立生活している障がい当事者は固定電話を引いていない方も少なくありません。

公衆電話は携帯電話やスマートフォンの普及により減少しています。そのスマートフォンも障がい当事者にとって、必ずしも使用しやすいとは限りません。

私達にとって「使いやすさ」や「便利さ」とはどういうことをいうのでしょうか？

いつでもどこでも話ができる携帯電話。私達が本当に声が聞きたいときはまさに今回の様な「緊急時」なのだ実感しました。人間の力で創りあげたものは、必ずしも絶対ではないということも、痛感しました。

ただ、私達にとって恵まれていたのは、昨年10月に、本部とホームヘルプ事業部、生活介護事業所アライブを1つの敷地内に併設させたことにより、一時的な避難所として活用できたということです。

トイレが4つあり、生活介護事業所アライブに静養室が2か所あります。ここに、エレベーターが復旧するまでの間、2名の障がい当事者が一時的な避難所として生活をしていました。

3. 起きてしまった人災そして避難の決意

① 関心だった原発

「原発が水素爆発だって！！」ラジオでニュースを聞いているスタッフが慌てて知らせに来ました。このときから、この生活は「一時的なもの」と、どこか楽観視していた自分の周りの空気が一変しました。テレビやラジオのニュースは原発の事故関連ばかり。日々テレビ解説者の声に耳を傾け、

不安を抱きながら、安心したり、怖くなったり、また不安になったりと地震や津波の被害で不安な県民の気持ちにさらに追い打ちをかけていきました。

やがて、それぞれが原発に対して不安な気持ちを抱え、それぞれが個人個人の行動にでます。

燃料棒がむきだし、空だき状態になっているというニュースが入れば「家族を連れて避難をしたい」、「すでに避難をしている」、「家族だけを避難させざるを得ない障がい当事者」。

気づけばニュースに翻弄され、日に日に人々の動きが変わっていきます。

さらには、物流の停止、ガソリンの激減、それによって、医療機関の機能が停止。そして私の住む福島県いわき市はゴーストタウンと化しました。

その当時、避難を決断した方々を決して責めることはできません。ですが、障がい当事者は、車に乗るためにヘルパーの支援を必要とします。食事をするのにヘルパーの支援を必要とします。障がい者自身も防災、緊急時対策というのも真剣に考えなければならぬことを痛感させられました。ですが、どのような対策をとるにしても、介助を必要とする障がい当事者にはヘルパーの力、協力は必要不可欠です。今までの信頼関係がある以上、ヘルパーを抜きにして防災、緊急時対策をねることは難しいと思います。

事業所と障がい当事者は今回の教訓を踏まえ、緊急時の対応というものを明確に話し合っておく必要があると考えます。それと同時に原子力発電所ではそのようなリスクを抱えながら発電をしていた。そういったことにもっと関心を持つべきだったと思いました。

4. 避難の決意

前段でも、少しお伝えしましたが、いわきは原発の事故以降、日に日に人が減っていきました。そしてついに、訪問看護が必要な人へも看護師が向かえない状態になってしまいました。当法人の理事長はこの出来事が避難を決意する大きな出来事になったとおっしゃっています。訪問看護も少しでも近い場所であればと、訪問看護が必要な方も生活介護事業所アライブへ合流し、看護を受けていましたが、それも不可能になってしまいました。いよいよ避難の決断をしなければなりませんでした。

その時、原発の事故は当時の政府の発表によると、30km圏内に住む方々に屋内退避の支持をだしていました。私達は、「医療等が必要な方の為に」、「全介助が必要で、緊急を要する方の為に」、「物資をいわきへ定期的に届ける為に」ということを大きな目的として避難を決意しました。もちろんそこには、ヘルパーと障がい当事者が一丸となって避難する前提があつてのことです。その為にはもちろんその家族も一緒に避難できる事が条件になります。

5. 当事者団体の力 支援者・救援者にみなさんで拍手を！

前段で申し上げた、ハードルの高い避難の目的や条件を実行する為に、次にあげられるような課題がありました。

①ガソリンが無い

② 難をする人数が50人以上と想定されるが、その様な場所を確保できるのか。

正直この状況下において、この二つのハードルを越えるのは大変厳しいと私は思っていました。

その前に一つ、この時の私の心境をお話させて下さい。ここから、避難の準備に取り掛かるまでの間、私は事業所の力に何一つなっていません。正直、何をどうしたらよいかわからない日々が続きました。理事長を中心に健常者スタッフが懸命に動いてくれている中、何もできない自分にいら立ちさえ覚え、疎外感もうまれました。私は当時の自分の心境をこの様に振り返ります。

まず、疎外感を感じた自分を反省しています。自立生活センターとは当事者の主体性を大事にした団体です。責任を担う役職等にも障がい者が就いています。私は自分自身で、この状況下で自分は役に立てないと決めつけてしまっていました。私自身、法人の理事を担っていますが、この考え方は誤っていたと反省しています。この様な事態だからこそ、自立生活センターが日頃より大事にしている、「我々はサービスを受ける立場だけではなく、担い手にもなりえる」という言葉にもあるように、自分が今できることをしてこそ自立生活センターのスタッフだったと反省しています。

私がなぜ、この時の心境を先にお話しさせて頂いたかということ、避難の準備から避難生活をした1カ月以上もの間、私は当事者団体のネットワークと力をこれでもかというほど体感させて頂いたからです。震災が起き、県内の福祉関係団体はそれぞれが日頃からのネットワークを通じ、懸命に、救援と支援を並行してきました。自立生活センターも全国のネットワークを駆使して、この様な支援をして下さったことに感謝の気持ちでいっぱいです。

話を少し戻します。3月16日、私達はまず法人が加盟するJIL（全国自立生活センター協議会）のメーリングリストで、避難先の確保とガソリンの調達の救援を依頼しました。すると3時間後には「東京都新宿区にある戸山サンライズ（新宿区障害者総合福祉センター）に50人分確保できました。」と連絡がはいりました。ガソリンは各センターが20リッターの携行缶の確保の為にホームセンターに走り、翌17日には、なんと広島県の自立生活センターから1昼夜かけて200リッターのガソリンが届けられました。18日には静岡から30リッターが届きました。私には各自立生活センターの障がい当事者スタッフのみなさんが、的確に指示をだし、自分達の活動と並行して私達の救援活動に汗を流して準備に取り掛かってきている姿が目に見えました。私達はセンターの利用者、ヘルパーに呼びかけをし、最終的に集まったのは、34名（利用者8名・ヘルパー10名・本部員3名・家族13名）でした。

この人数の内訳に様々なことがらが現わされています。やはり、知らない地域に行く不安、初めての人に介助されることへの不安、他の家族が残ると言えば一人で避難することはできない・・・等の理由からです。もちろん、いわきに残るといった方への支援を停止する訳にはいきません。その為のヘルパーもいわきに残っていただくこととなりました。

戸山サンライズへの避難は、いわきに残り懸命に生活をする障がい当事者の方、それを支える介助者や支援員の為でもありました。一方、戸山サンライズへ避難するメンバーは5時間をかけ、到着をしました。

6. 避難生活で得たもの

戸山サンライズ到着すると、東北関東大震災障害者救援本部、TIL（東京都自立生活センター協議会）をはじめ、沢山の方々から暖かく迎えてくれました。

私達は戸山サンライズへ避難したメンバーを「自立村」の家族と考えて生活することにしました。

①ニーズの整理と、社会資源の充実さを実感

早急に救援本部と話し合いを詰めたのは、避難してきたメンバーのニーズを整理することと、介助体制を確立することでした。同じ自立生活センター同士でありましたが、初対面の方も多かったことから、救援本部では現地コーディネータを派遣して下さいました。

介助者の派遣での支援は全面的にTILが支援をして下さいました。

③戸山サンライズで考えた、本当の「自己選択」「自己決定」「自己責任」とは、そして自生活とは

私は戸山サンライズでの生活中、「気分転換に」ということで、都内のCILの自立生活体験室に宿泊させていただく事がありました。日中、センターの所長さんに誘われ、かつての「自立生活運動仲間」の方にお会いできる機会がありました。そこで、当時の写真やテレビに取り上げられた時の映像などをみさせて頂く機会がありました。見させて頂いた映像の中に、私の心が動かされるものがあったのです。ある障がい者の夫婦の生活に密着した映像でした。その夫婦はまず、駅前で介助者を見つけるためにピラ配りを行っていました。

その映像もシビアで、何事もないかのように夫婦の前を人が通り過ぎて行きます。それでも懸命にピラを渡そうとしている映像でした。次に移ったのは料理をしている様子です。

記憶がさだかではありませんが、ハンバーグを作っていたらしゃったと思います。介助者は女性の指示の通りにしか動いていません。ハンバーグがみるみる焦げていきます。

その夜、戸山サンライズに帰ると、嬉しい様子が見れました。戸山サンライズに避難してきたメンバーは、ヘルパーや障がい当事者、そしてその家族でしたが、日頃より関わりが多いヘルパーとは

限りませんでした。それに加えて、お互い慣れていない環境での生活ということで、介助者との関係を心配していました。ですが、一生懸命介助の仕方を覚えてもらおう、ヘルパーはそれを一生懸命覚えようという様子がみられました。すると私の頭の中で、昼間見せていただいたあの映像がよみがえりました。「今はあの夫婦の様な力が必要な時なのかもしれない・・・」障がい当事者が、良い介助者を見つける力ではなく、障がい当事者と、介助者が共に力をつけていくべき状況だったのかもしれない。でもそれは緊急時のみならず平常時でも必要なことであり、自立生活センターが伝えていかなければならないことだと感じました。

自立生活センターは「自己選択」「自己決定」「自己責任」というものを大事にしています。この3つのテーマをふまえてあの映像を振り返ると、きっと障がい当事者だけではなく、ピアを受け取った介助者もお互いに「自己選択」「自己決定」「自己責任」のもと行動したのだと思います。私自身、これから注意しなければいけないことは「選択」、「決定」、「責任」を全て自立生活センターまかせにしないことです。

④自分達で避難所を作り上げた！

避難所は障がい当事者はもちろん全ての人々に決して過ごしやすい環境とは言い切れません。もちろん避難所各所で避難者の支援を懸命に行って頂いております。しかし、人手が不足しているのが現状ではないでしょうか。

私達が生活させて頂いた戸山サンライズでは、施設内の食堂で食事をとることができました。その際も、できるだけ、栄養バランスを考えたメニューに切り替えて頂きました。

救援本部では、朝の9時～21時のある程度の介助派遣が終了するまで、コーディネーターを派遣して下さいました。被災地というのは震災直後、支援を行いたくても現地に入れないという問題もあると思います。それを被災者側が支援体制の整っている場所に一時的に避難することで、体制の充実した緊急避難ができたと思います。まさに公共の場（戸山サンライズ）と市民団体がタッグを組み、この形をつくりあげて下さいました。様々な形で支援をして下さっている皆さん、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

7. 私達がすべき支援とは 私達も想定外とはもう言えない

最後になりますが、1000年に1度ともいわれる未曾有の大震災が起きました。しかし規模の違いはありますが、震災と呼ばれるものを私達は幾度となく経験しています。その都度、今後想定される危険性（原発の事故も含め）や課題が取り上げられてきたと思います。

私達障がい者自身もこれまでの震災の経験を踏まえ、自分達の目線で災害・防災に対して取り組

んできたでしょうか。今回これまでお話させて頂いた内容も、以前に震災を経験した方々にも共感して頂ける部分が多いかと思います。

私達は、自分達の目線でできることの一つとして、「放射能から身を守る」というパンフレットを公益信託うつくしま基金 災害救援緊急支援助成を受け、作成いたしました。

(http://space.geocities.jp/iwaki_cil/ いわき自立生活センターのページからご覧になれます。)

また、国からの公表を待つだけではなく、線量計を購入し、自分たちで、センター付近を毎時計測しています。私は、自立生活センターに所属し10年目になりますが、「障がい者の地域での自立生活支援」をしてきました。もしかしたらいつからか「一人暮らしまでを支援すればゴール」という意識が出来上がっていたのかもしれませんが、しかし、よく考えてみれば、「その人らしく生きる」ということを考えた場合、「一人暮らしをするにもしないにもその人の自己選択」であるということを確認してあげなければなりません。私がすべきことは、「その人らしさ」を見つけることではなく、「その人らしくいられる地域や社会」を創ることだと思いました。その為には災害や防災への活動も必要不可欠です。「放射能から身を守る」パンフレットの作成等先駆けとして、様々な形で私達が私達らしくいられる地域づくりをしていきたいと思っています。

そして今、私のセンター周辺に1000戸の仮設住宅が建てられました。今まさに、これまでの経験を生かし、力をつけた私は仮設住宅の人達が「自分達らしく生活できる環境」を創り上げていく時だと感じています。

釜石のスイセン、東京に咲く 震災風化の防止願い



岩手日報

2013/04/21

【東京支社】東日本大震災で津波被害を受けた釜石市鶴住居(うのすまい)町で掘り起こされたスイセンの球根が、東京都千代田区の「庭のホテル」で花を咲かせた。被災地への関心を高めてほしいと同市の鍼灸(しんきゅう)マッサージ師、古川貞治さん(38)が東京都のNPO法人日本リザルツ(白須紀子代表)に球根を託した。津波を乗り越えた球根が大都会の真ん中で再び命を輝かせ、被災地との心をつないでいる。

同法人が釜石市で復興支援活動をしていた縁で受け取った球根。これは津波で行方不明になっている古川さんの親戚が育てていた。津波で被災し、全てを失った古川さんにとって、残された大切な球根だった。

同ホテルの福井瑞樹セールスマネジャーは、「本当に感動した。一度海水をかぶったのに芽だけでなく花まで咲いた。こちらが逆に勇気もらっている」と喜ぶ。県内外で津波の記憶の風化が進んでいると感じる中の吉報に古川さんは「県外の人が花を見て、被災地への関心を高めるきっかけにしてくれたらいい」と語った。

写真＝釜石市で掘り起こされ、都会で力強く花を咲かせる1輪のスイセン

東京・千代田区の庭のホテル

2013年4月5日金曜日

希望の水仙

ホテルの3階には、小さな空中庭園があります。
先週、その片隅に1輪の水仙の花が咲きました。



東京・千代田区 庭のホテル

この水仙は、東日本大震災にて被災された岩手県釜石市で
整体・鍼灸マッサージのボランティアをされていたらっしゃる
古川貞治さんという方の叔母様がご自宅の庭で育てていたものです。
叔母様は残念ながら現在も行方不明のまま
古川さんがかつてのご自宅にて唯一見つけたのが
この水仙の球根だったそうです。

昨年の11月に、セールス担当者がNGO特定非営利活動法人日本リザルツの
白須様よりこの大切な球根を譲り受け、ホテルの庭園に植えました。
潮水にさらされてしまった8個の球根は
果たして上手く芽吹いてくれるのか心配でしたが
1つだけグングンと成長し、綺麗な花を咲かせました。
この植物の生命力の強さに、我々スタッフも感動しました。

今年は1輪だけでしたが
来年は更に多くの花が咲くよう
今後も大切に育てていきたいと思えます。

2011. 3. 11 東日本大震災 岩手県釜石市鶉住居町鶉住居地区
高齢者施設デイサービスセンター・グループホーム『ございしょの里』

大津波からの生還 利用者サバイバル激闘記



古川 貞治

高齢者施設ございしょの里 介護支援専門員

釜石ケアセンター東洋治療院 院長

(聴き取り編集 松沢 明彦)

3月11日 大きな揺れ、大きな津波が襲ってきました。
デイサービスセンター『ございしょの里』の掛時計は15時35分。
今でも、大津波到来の時を刻んだままである。

3.11 突然の地響き 落石 砂煙

この日、デイサービス利用者に完成したばかりの三陸縦貫道(3月5日開通)を送迎車内より見ていただくプログラムを組んでいました。釜石方面に住居がある利用者は、普段の帰宅ルートよりも遠回りとなります。そこで、利用者には少し早めの帰宅準備をお願いして、スタッフは送迎準備を進めていました。また、鍼灸マッサージ施術を終えた私は、送迎車の準備を始めていました。

突然、地中より「ゴオッー 。ゴオッー 」と岩盤と岩盤が擦れ合うような音。次の瞬間、施設裏山の崖から、大きな一塊の岩が轟音を伴いながら落下。続いて、地面からは砂煙が天高くモウモウと舞い上がる様相が目の前で起きていました。

古川理事長(以下、理事長と記す)が、グループホーム棟から外へ飛び出してきました。理事長の目的は、送迎車両を安全な場所への移動。また、駐車場は災害時の避難場所として行政から指定があり、避難者のスペース確保の必要性もありました。私は、デイサービス、グループホームのスタッフと共に、利用者の安全確認を行うと同時に、今後何が迫ってくるのかと周りの様子をうかがいました。施設から見渡すことができる範囲では、街の様子は特別の変化は見られませんでした。

この時点では、利用者の方々は動揺される様子もなく、少しざわつく程度でありました。行政関係からの避難指示連絡はなく、『津波警報』も耳にする事はありませんでした。しかし、徐々に小・中学生、教職員、父兄、医療機関関係者、地域住民の方々が続々と集

まり始めました。理事長が日々の訓練通り、小・中学生にクラス単位に名札を手渡し、点呼確認のための列が並び始めていました。生徒達の中には恐怖に怯え、青ざめた表情の女の子がいました。その後、理事長から避難された方々へ対して、この当施設での待機指示が伝えられ、私は車の移動もままならず、時間だけが静かに過ぎていきました。

私は当施設から少し離れた場所に自宅があり、母へ避難指示を伝えるため家に向かいました。家に着くやいなや、母に避難指示を伝え、すぐに施設に戻りました。街中の様子は、いつもよりも心なしか静か。通りには、人の気配も感じられませんでした。ただ、古いビルの外壁の一部が剥がれ落ちていました。また、破損した水道管から水が少し噴き出している光景がありました。

さらなる避難 大津波からではなかった

当施設には、避難をしてきた小・中学生の父兄・関係者の車が集まり、狭い道を塞いでいました。その状況下、小・中学生が再度避難移動を始めたため、道路は車だけではなく、人々で溢れかえっていました。生徒達は恐ろしいくらい言葉を発することなく、次の避難場所へと移動を始めました。

(後日、この時点では学校関係者の誰一人として、津波到来を想定できていた者はいなかったことが判明します)

行政より津波での避難場所としては、当施設『ございしょの里』が指定されていました。さらに別の場所へ避難する理由は、施設裏山の崖が大きく崩れてしまったことにありました。断続的に揺れ続ける余震。さらなる崩落の危険性が高まっていました。津波から身を守るための避難移動ではなく、崖の崩落を目にしたことからの避難移動が行われました。

その時 施設の利用者達は

2階グループホーム入居者へは、フロア内にて待機。1階デイサービス利用者へは、津波到来の方が一の可能性を伝えて、2階への移動準備を進めていただきました。

(この時点でさえも、津波到来の可能性での避難準備でした)

デイサービス・グループホーム利用者は施設裏山の崖が崩落する中でも、避難移動をし

ませんでした。その理由としては、人、車が溢れる道路の混雑状況、高齢者の避難に要する時間等がありました。「施設内に留まること」と、「避難途中での危険＝リスク」を両天秤にかけた時、避難することでのデメリットを考慮したためでもありました。さらに施設に留まる判断の最大理由は、理事長が常々「三陸沖での津波到来は地震発生から25分だ」という言葉にありました。

後日、『高さ3メートルの津波到来警報』の行政放送がされていたことを知りました。しかし、私をはじめ施設スタッフ、避難されてきた方々、小・中学校関係者も、この『高さ3メートルの津波到来警報』を耳にした者は誰一人いませんでした。しかし、高さ3メートル程度の津波到来であれば、湾を深く入り込み、東洋一と誉れ高いスーパー堤防を越えて、街中まで津波が侵入する危険性は全く無かったこととなります。

(この後すぐ、3メートルなどという数字をはるかに超えた30メートル超の大津波が街を襲ってきたのです)

川を逆流する黒い壁

理事長と私は道路周辺から聞こえてくるざわめきの中、状況確認のため川へ向かいました。施設前の道路は小・中学生を含めて多くの方々が、避難の真ただ中にありました。その時、「来たぞー。来たぞー」と大きな叫び声を上げながら、逃げてくる消防団員に遭遇しました。500メートル以上先の川に目を転じると、川を逆流してくる大きな黒い壁が視界に入ってきました。私は大声を張り上げながら、デイサービスセンターへと戻り、利用者の2階への避難指示をスタッフに伝えました。しかし、エレベーターは停電のため利用できません。そのため、利用者はスタッフの介助を受けながら階段を上り、グループホーム棟2階への避難を進めました。利用者の中には、足腰が弱い方、認知症の方、脳血管後遺症のため片マヒの方も含まれていました。されど、スタッフの速やかな介助により、デイサービス、グループホーム利用者は避難を終えることができました。

大津波に飲み込まれる

次々と押し寄せる大津波の濁流は川の堤防を越え、当施設『ございしよの里』にもなだれ込んできました。そのすさまじい水量に、車、家、様々なガレキが折り重なりながら押し寄せてきました。

「バリッ！　バリッ！　バリバリ！　バリバリ！」、家屋の柱が裂ける音。

「バアーン！ドドーン！ ガガーン！」、様々な物がぶつかり合う激しい音。

「グオー！グオー！ グオーグオー！」、大きな津波が押し寄せる濁流の音。

今までの人生の中で聞いたことがない音が、街全体に鳴り響いておりました。そして、私の目の前を車や家財が流れ去っていく。この光景を目の前にしている私は、どうしても現実のことに受け止めることができませんでした。映画やテレビドラマのワンシーンをしているかのような錯覚。茫然と立ち尽くすだけの自分がそこにありました。

津波の流れは全く予測などできません。様々な物を巻き込みながら、徐々に水かさを増していきました。ゆっくりと広がり続ける濁流の様相に、見慣れた街の風景が壊されていく。数えきれない車、多くの家々は、はるか遠くまで流され、山の壁面にぶつかり砕けながら動きを止める。また、様々な物が水中へと引きずり込まれる様子が、繰り返し繰り返し再生画面を見るがごとく、目の前で展開されていました。

利用者に迫りくる危機的状況

ふと我にかえりますと、地面に降りることが出来る程度に水が引いていました。しかし、すぐにまた次の波が押し寄せてくる。この押し寄せては引き、押し寄せては引くという光景がどのくらいの時間続いたのか、全く思い出すことができません。

施設2階に避難した利用者・スタッフは、海側方向よりも遠くに位置するグループホーム別棟にある談話室（木造2階建て構造）に避難をしました。

私は、「本館（鉄筋構造）に戻れ！」と施設外部より指示を出しました。しかし、極度の緊張とさまざまな音が混ざり合う状況下、私の声など届く訳はなく、周りの音にかき消されていたようでした。

声が届いた時には水が再び押し寄せ、その水圧から扉を開くこともできませんでした。また、扉を開けることによりさらに水が浸入してくる。為すすべもなくただ時間だけが過ぎていきました。数名のスタッフにて扉や浸水部分を塞ぎ、テーブルの上に利用者の方々を誘導しました。利用者がテーブル上から転倒をしないように、スタッフが体を支え続けました。地震・津波に怯える利用者が落ち着いていただけるように声をかけ、見守ることが唯一できることでした。同時に外部の状況をうかがうものの、できることなど何一つなく、外の光景をただただ見つめることが精一杯でした。

その後、引かない水は1階の天井を押し上げ、2階の床板をぶち割り、その割れ目からも水が溢れ出してきました。膝の高さまで水は上がり、水圧にて足を取られる利用者もお

りました。また、認知症状からこの状況を理解できない利用者、水の冷たさに我慢ができず不平を訴える利用者も出てきました。極限の状況下、忍び寄る恐怖よりも、なすがままに身を委ねることしかできない絶望感が空間を占めていきました。

「もうだめだ」と諦める利用者。

「お世話になった皆さんと一緒に死ぬことができるのであればいい」とつぶやく利用者。同じ時間、同じ空間を共にしている方々でありましたが、一人ひとりの胸中には、「凝縮されたそれぞれの人生観」が交錯していました。

絶望の中 歌声が救う

絶望感に支配されそうになっていた空間。その空間に、デイサービス利用者のお一人が歌を口ずさみ始めました。その方の声が続いて、他のデイサービス利用者、グループホーム利用者、スタッフの声も重なり、歌の輪が広がっていきました。さらに、手拍子なども加わり、なんとも言えない共感が室内に広がっていきました。

施設外に目を向けると、水の勢いは対流するだけとなっていました。水かさは徐々に減り、地面があちこち顔を出してきていました。「爆弾が落とされた残骸なのか」、私はとても現実とは思えませんでした。街の全てが泥と砂に覆われ、車や家が幾重にも重なり合っている。また、目の前にあったはずの家が全く跡形もなく、どこかへ消えてしまっている。あちこちに破壊された車からは、けたたましく鳴り続けるクラクションの音。いつまでも街の中に、異様に響き渡っていました。私は今でもあの音が耳から離れません。

1階デイサービスセンター 完全水没

私はぬかるみとガレキに覆われた土の上を、釘を踏み抜くことがないように恐る恐る歩を進めました。1階施設部分のガラス戸・ガラス窓は原形を留めず全てを損失。外壁のヘーベルはあちこち無残にえぐりとられ、施設内部のケイテン（天井ボード等に使用される鋼材）は落下。砂、泥、ガレキなどが無造作に堆積。施設内へ入ることなどは、全くできる状態ではありませんでした。そこで、非常階段に堆積した泥、ごみ、ガレキを取り除き、避難経路の確保を行いました。さらに、デイサービスフロア部分、道路状況の確認を行いました。その結果、今すぐに利用者がこの施設から避難することは困難と判断しました。そのため、耐震強度のある1号棟内の片付けを出来る範囲で行い、使用できる道具類をガレキの中より探し出し、目の届く範囲に集積することに努めました。

その後、2階フロアーに避難していた利用者の様子を確認後、スタッフが浸水せずに済んだ衣類を見つけ出し、利用者の方々への着替え介助を行いました。次に、1号棟ホールへと移動して、濡れずに済んだ布団、毛布を床に敷き詰めていきました。

理事長決断 「室内にて焚き火だ」

3月の日暮れは早く、外は暗闇に包まれていきました。

この日は例年以上に寒く、厳しい冷え込みが利用者に忍び寄ってきました。

大地震・大津波によりライフラインは全滅。停電により暖房器具を使用することなどできません。水に濡れて冷え切っている利用者の身体を暖めてあげたい。そこで施設室内にて焚き火をして、『暖をつくる』ことにしました。理事長の一言、「施設室内が炎、煙で使い物にならなくなっても構わない。利用者の命を守ることを優先しよう」。

ガレキの中から木材を拾い集め、ガレキの中から見つけたノコギリを使い、小さなマキを作りました。そして、介護日誌などの資料を焚き付けとして、火を起きました。施設室内で焚き火を囲み、利用者、職員が皆で体を寄せ合う。外からの突き刺さる寒さを、なんとかしのぐことができました。

夜の21時前後、デイサービス、グループホーム利用者の中で介護度の高い方を優先、浸水を免れた6畳間に寝具を敷き、体を横たえていただきました。その他の方々も焚き火の近くに集り、交代を繰り返しながら暖を取っていただきました。理事長は絶えず利用者・スタッフを励ましながら、「笑い話」や「昔話」をすることで、皆の気持ちを和ませ続けていました。

この時、使用可能であった懐中電灯は一つ。この一つだけの光を握りしめ、ガレキの中から燃やすことが可能な木片を拾い続けました。

冷蔵庫、棚の中の食料品も全て泥水に浸かりました。その浸かってしまった食料品の中で、唯一口に入れることができそうなものは「アメ玉」だけでした。

この夜、私達スタッフが唯一できたことは、このアメ玉を利用者にお配りすることだけでした。

理解できない 腑に落ちない現実

その後、私は状況把握、避難経路の確認、さらに行政対応の情報収集のため施設外に出

ていきました。

街の中には、全く灯りはありません。月明かりだけが、街を照らし出していました。ガレキの中を進んでいくと、「夢だー。夢だー」と叫ぶ声。自らに言い聞かせるかのよう
に、大きな声を出しながら歩きまわっている人の声でした。

また、大津波で跡形もなく流されてしまった自分の家を探しまわる人。家族の安否を確かめようと探し求めている人。多くの人々が壊滅状態の街を、それぞれの想いを胸に抱きながら、歩きまわっていました。この時の状況を理解できている人など、誰一人として街の中にはいませんでした。

大津波が引いたガレキの中は、物言えぬ静けさと何を宿しているのかわからない暗闇。何気なく空を見上げると、大槌方面の山影が薄ぼんやりと赤く染まっていることに気がつきました。

(後日、大槌町中心部全体が炎に包まれていたことを知りました)

ガレキに埋まる街の中から施設に戻りました。施設内部はかすかに暖かく、焚き火の煙が充満していました。利用者は眠っているのか、起きているのか、魂が抜けてしまったような虚ろな目、うつろな顔がありました。

デイサービス利用者で認知症の男性数名が、「オレの靴が片方無くなった」、「私はカバンが見当たらない」と急に訴え始めました。大地震、大津波被害を経験している認知ができていません。そのため、目の前に起きていること、断片的状況のみしか理解できない利用者の訴えが続きました。スタッフ達はこの認知症症状の方々への対応に、苦慮する場面が続きました。

介助の中ではトイレ誘導、排泄介助が大変でした。ポータブルトイレに紙オムツを敷き、使用する度に取り換えながら介助にあたりました。

『いのち』に寄り添う

利用者の命を守る。スタッフ達は、一睡もすることなく朝を迎えました。理屈ではなく、実感覚として利用者の『いのち』に寄り添う。これほどまでに実感のできた時間ありませんでした。私以外のスタッフ達も皆、同じ気持ちに包まれていたと思います。

夜が明けてきました。

やっと、外部より食べ物の搬入が少しばかりあり、利用者に配ることができました。

また、岩手県の薬剤師協会へ働きかけを行い、近くの『ドラッグストアー』から商品取り出し許可を得ました。ガレキの中に身を挺し、壊れ流れついた屋根の上を超え、坂を這い登り、道なき道を進み続けました。目指した『ドラッグストアー』には大勢の人ばかりができており、品物の奪い合いが起きていました。私は、ガレキの中から水分となるドリンク類を見つけ出し、施設へと持ち帰ることができました。利用者達が昨日の大震災後、初めて口にできる水分となりました。

理事長、スタッフ達に外部状況を説明。その後、消防署の指示にて施設外へ避難することが決まりました。そのための避難経路の整備と安全確認、避難手順の打ち合わせを行いました。実際的には、自力歩行が可能な利用者にはスタッフが付き添い、二人一組にて避難移動。自力での避難が困難な方には、竹の棒を2本用意して毛布を包み簡易担架をつくりました。簡易担架の両側面部分には首からロープを掛けてサポート、前後は1名ずつが担架の棒を支え持つ。合計4人体制にて利用者1人の避難移動を行いました。また、特に体重のある方には、6人体制にて行うこともありました。これは大変過酷な移動介助を強いられました。足元がおぼつかないガレキの中、さらに坂を登る必要も求められました。毛布に包まれた利用者の体は実に重い。しかし、この重さとは、「生命そのものの重さ」に他なりません。足場の悪い中、一人ひとりが歩調を合わせながら進んでいく。ガレキ、泥、砂の交じり合うアップダウンの道なき道。ただただ、仮の避難所を目指しました。そして、そこから次の仮の避難所へと移動をする。この避難移動介助を幾度となく繰り返し行いました。

避難時 認知症状の方々の困難さ

利用者が不安を抱くことがないように声をかけ、話かけながら避難を行いました。さらに、利用者によっては周りの壊滅状態の風景を見なくて済むように、毛布で目隠しをする気配りも行いました。この避難移動介助には当施設職員から2名、地域住民1名、消防隊員3～4名が参加をしてくださいました。私は、この全ての避難移動介助に関わることになりました。また、消防隊員の方々は背中に利用者をおぶり、一人の付き添い者が見守りながら避難移動をする場面もありました。

一夜明け、大変な広範囲の被害状況がわかってきました。救助を待つ人々の命を救うためには限られた時間しか残っていません。多くの消防関係者を失い、限られた救助隊の人手しかありません。次から次へと終わりなき救助現場が続く救助隊員達は、終始苛立ちが隠せませんでした。利用者の担架搬送中に足がもつれて転倒する隊員。昨日からの極限状態の中、肉体的にも精神的にも限界、緊迫した場面が展開されていました。

利用者の中には状況を全く理解できず、歩みを止めてしまう方、道路に座り込んで寝転んでしまう方も出てきました。さらに、「タクシーを呼べばいいだろう」と叫び出す方。認知症状からくる発言・行動に多くの方々が困惑し、戸惑い、苛立ちました。救助隊員達のなんとも言えない表情を忘れることができません。

時間の経過と共に、突然に歩みを止める方が一人、そして一人と増えていきました。その状況に感情の抑制を失った救助隊員から「ケツを蹴飛ばせ」と、どなり声が響きました。さらに、「次（救助現場）がある。早くしろ、歩かせろ」と消防幹部の言葉。今から思い返しても言葉にならない、言葉にできない壮絶な状況がありました。そして、最後の難所が高さ1メートル程の傾斜の崖。利用者を支えながら背負いながら、登り上がって行きました。この崖を超えることなくして、命を守ることができない。皆死にものぐるいで、新設されたばかりの三陸縦貫道のアスファルト道路へよじ上りました。

この地点には、救急車両、消防車両、建設現場の工事用トラックが集結していました。次から次へ避難された方々のピストン輸送が行われていました。

昨日から一瞬たりとも気が抜けなかった私。
利用者の方々を乗せた工事用トラックが、私の視界から小さく小さくなっていく。
トラックの車の影が小さくなればなるほど、私の心に安堵感が広がって行きました。

「避難所生活」 「仮設住宅生活」 「街の復旧・復興」 語り は続きます



逃げ遅れる人々

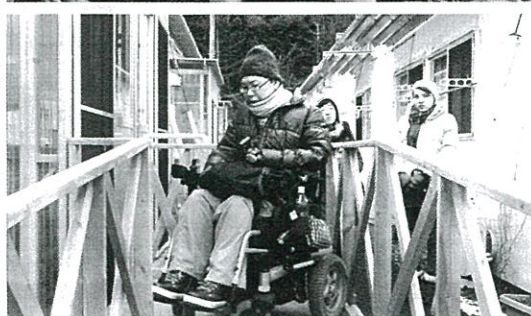
東日本大震災と障害者

あの日から、
私たちに何があったのか—

監督：飯田基晴（「あしがらさん」「犬と猫と人間と」）・製作：東北関東大震災障害者救援本部

マスメディアでは断片的にしか取り上げられない、
被災地の障害者のさまざまな現実に迫る。 21

撮影：飯田基晴・穴戸大裕・編集・ナレーション：飯田基晴
制作：映像グループ ローポジション
2012年/日本語/74分/16:9/ドキュメンタリー
日本語字幕・選択可(聴覚障害者用)
作品URL <http://www.j-il.jp/movie/>



障害があるということは、 災害時には普段以上のハンディとなる。

2011年3月11日の東日本大震災、未曾有の大災害の中、障害を持つ人々に何が起きたのか?福島県を中心に、被災した障害者とそこに
関わる人々の証言をまとめた。

障害ゆえに、地震や津波から身を守れず、また必要な情報も得られない…。

「ここではとても生活できない」「周囲に迷惑をかけるから」と、多くの障害者が避難をあきらめざるを得なかった。そうしたなかで避難所に入った障害者を待ち構えていたのは…。

更には仮設住宅へ入居しても、そこでも大変な不自由が待っていた。原発事故により市民の姿が消えた避難区域には、取り残された障害者が不安な日々を送っていた。大震災に翻弄される障害者と、その実態調査・支援に奔走する人々の、困難の日々。

住み慣れた土地を追われ、避難先で新たな生活を模索する時、涙とともに故郷への思いがあふれる。

マスメディアでは断片的にしか取り上げられない、被災地の障害者を取り巻くさまざまな課題や問題点が浮かび上がる。

東日本大震災と障害者

2012年/日本語/74分/
16:9/ドキュメンタリー
製作:東北関東大震災障害者救援本部

**DVDパッケージも
発売中!**

- 一般価格: 3,000円
 - 団体・ライブラリー価格(上映権つき): 10,000円
- 詳しくは東北関東大震災障害者救援本部へお問い合わせください。

東北関東大震災障害者救援本部

<東京事務局>

〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11-1F

全国自立生活センター協議会(JIL)内

電話:042-631-6620

FAX:042-660-7746

E-mail:9enhonbu@gmail.com

作品URL:http://www.j-il.jp/movie/

東北関東大震災障害者救援本部は、DPI日本会議、全国自立生活センター協議会、ゆめ風基金といった障害者団体を中心に発足し、震災直後からさまざまな支援活動を行って来ました。被災3県に障害者支援センター設置、救援物資の調達と輸送、避難者の受け入れ、ボランティアの派遣、避難所や仮設住宅での聞き取り、移送支援など、現地の状況に応じて取り組んできました。

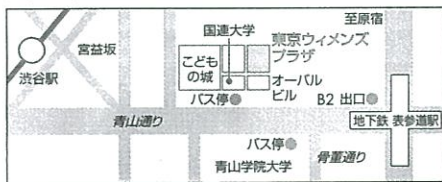
活動を通じ、当事者の声を記録すること・伝えることの必要性を感じ、この映像製作がスタートしました。また、震災から時間が経つにつれ、「何があったのか、忘れてはならない」と感じています。それは決して被災地の人々のためだけではありません。本作を通じて各地の障害者とその関係者に、災害時の備えの必要性を伝えていきたいとも考えています。そして、被災地の一日も早い復興と、障害の有無を問わず誰もが安心して暮らせる社会の実現を願います。

完成記念上映会のご案内

重要 上映会は予約制です。
お申込みはFAXまたはメールでー

- 日時 2013年2月3日(日)2回上映
1回目: 10時半開場・11時上映開始
2回目: 13時半開場・14時上映開始
※各回とも救援本部・監督による舞台挨拶あり
- 料金 一人1,000円(障害の有無に関わらず一律)
- ※ 予約制(車いす・情報保障準備のため)
(満席になり次第締め切らせていただきます)
- 託児あり: 予約制・無料

- 会場: 東京ウィメンズプラザ(ホール246席)
渋谷区神宮前 5-53-67 電話 03-5467-1711
渋谷駅: 徒歩12分 バス青山学院前
表参道駅: 徒歩7分



FAX: 042-660-7746
メールアドレス: 9enhonbu@gmail.com

お申込みの際には以下の情報を明記して
「東北関東大震災障害者救援本部」宛へ

- ① 御名前(ふりがな)
- ② ご連絡先(TEL/FAX/メールアドレスのいずれか)
※TEL番号の場合は、日中の連絡可能な番号
- ③ ご参加の上映会(1回目もしくは2回目)
※以下、④～⑦は必要な方のみ
- ④ 補装具(車いすスペース確保のため)
- ⑤ 介助者同伴の有無、人数
- ⑥ 情報提供のご希望/必要な補助
- ⑦ 託児の場合、お歳と人数、障害の有無

被災した障害者招き 災害弱者支援考える

神奈川工科大、来月9日

神奈川工科大(厚木市)の小川喜道教授(障害者福祉論)の研究室は11月9日の学園祭で、「震災と障害者」をテーマにしたイベントを開く。岩手と福島で被災した障害者ら2人を招き、「災害弱者」への支援のあり方を考える。

ドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々」東日本大震災と障害者(74分、飯田基晴監督)を上映。その後、岩手県釜石市で認知症高齢者のデイサービスセンターを運営する古川貞治さん(39)と、福島県いわき市出身の障害者、小野和佳

さん(30)を交えて討論する。

震災時、古川さんのデイサービスセンターは1階が津波で水没し、高齢の入居



学園祭に向けて話し合う小川研究室の学生たち=神奈川工科大

者らをテーブルの上に乗せ、職員が体を支えながら全員の命を守った。自宅も津波で流され、仮設住宅に暮らしている。

小野さんは、NPO法人いわき自立生活センターの職員だった時に被災し、車いすでの避難に苦労した。いまは相模原市に移住している。

小川教授の研究室は4月からイベントの準備を進め

てきた。4年生の安楽智樹さん(22)は卒業研究で、停電時、電動車いすの利用者が何を備えたらいいかなどを調べている。「障害者に大切なことや不安に思うことでも、健常者が気付かないことがある。命に直結する問題なので、被災者の生の声を聞いて、ぜひ一緒に考えてほしい」と話す。

イベントは午後1時半～午後4時、同大のE3号館で。参加無料。手話通訳とパソコン要約筆記がある。

小川研究室(046・291・3153)へ。

◇ 「逃げ遅れる人々」東日本大震災と障害者」の上映会は11月14日、厚木YMCAの主権で厚木市文化会館ホールでもある。午後6時半開場。入場無料。問い合わせは厚木YMCA(046・2223・1441)。

3・11から未来へ

東北被災地活動報告

KWR車椅子修理屋
(神奈川工科大学サークル)

2013年5月3日、4日、5日

新潟医療福祉大学(FWS)と共同で実施

5月3日(金)女川町



最初に訪問した先は、女川医療センター周辺

5月3日(金)女川町



女川役場にて、修理活動。

5月3日(金)女川町



修理用車いすは、役場にあった車いす。役場に6台寄贈。

5月3日(金)女川町



建設課の職員さんから今後の復興についてお話を聞きました。

5月4日(土)大船渡市



介護老人施設 気仙苑にて修理活動。施設内の車いすを修理。

5月4日(土)大船渡市



居住者の車いすを清掃しました。

5月4日(土)大船渡市



民宿近くで破壊された防波堤を発見。自然の脅威を感じました。

5月5日(日)女川町(江島)



シーバル女川汽船「しまなぎ」にて江島へ出発。

5月5日(日)女川町(江島)



島内のゴミ拾いをしました。

5月5日(日)女川町(江島)



江島住民の方々とお茶会をしました。とてもにぎやかでした。

過去に行ったボランティア活動

2011

- 3/25 福島への車いす寄贈支援
- 4/ 2,17 埼玉県加須市へ被災地訪問
- 4/23 神奈川工科大学にて支援物資を集める
- 4/24 埼玉県加須市へ支援物資寄贈
- 7.23,24 被災地ボランティア(石巻市)
- 12/22~24 被災地ボランティア(女川町、一関市)

2012

- 5/3~5 被災地ボランティア(女川、気仙沼、南三陸、一関)

連絡先

神奈川県立 神奈川工科大学 創造工学部
ロボット・メカトロニクス学科
スポーツ・健康生活科学コース
小川研究室

〒243-0262 厚木市下荻野 1030
TEL 046-291-3153 FAX 046-291-3262
e-mail : ogawa@rm.kanagawa-it.ac.jp
URL : <http://www.we.kanagawa-it.ac.jp/~ogawa/>
